

## 怠けものの一言

日名子 太郎

私は元来の大変な怠けものであるのだが、他人は容易にそうは思ってくれない。それは怠けものなのだが、小心者のため、本質をさらけ出すだけの勇気のないことが原因なのだろう。

学生時代に、大層、漱石のものに引きこまれて非常に愛読したのだが、その理由も、あの漱石文学の「則天去私」思想、もちろん漱石自身はこれを彼の全作品でほり下げ、解明して行こうとしたに違いないが、私のような凡庸なものは、それをもっと単純に怠けもの流に感じとって、「まあ

まあ適当にやるさ」という解釈をして来た。作品の一つである『それから』の主人公の代助は、最高学府を出て毎月親から小遣いしてもらい一軒家をかりてばあやと書生をおいて、ぶらぶらと暮らし、「仕舞にアソニユイを感じ出して」おり、「食う為の職業は誠実には出来にくい」と思っている男である。この代助などは、今の平均的日本人には考えも浮かばないし、またもしそうしようと思っても出来ないのが現代の社会生活であろう。が、私はそれに憧憬の念さえわいた。

ここで今更、私のようなものが、人は一体、なんで働らくのかとか、何の為に生きるのかといった難かしいことを述べようとは思わないのだが、兎も角、いまの日本人は、働らきすぎるといのが私の持論である、そのくせ自分は、前述のように勇気がないからずるずるとまわりから働らかされて、たえず面白くない。不満一杯な気持ちを抱いているのだから仕方がない。したがって停年延長などという一般世論には大反対で、停年短縮説をさえ支持したいぐらいである、またそれが皮肉なことに、本年から

大学院の専任とやらになって、七十歳まで居られると教務から説明されて情なくなつたのは自分ばかりで、家族のものは、皆喜んでゐるのだから困つたものだ。

本当の仕事、といつても何が本当かはよくわからないとしても、少なくとも自分だけは納得してやれる仕事を、自由気ままにして居れたらどんなに幸福かと思う。そして、もしその仕事か、この社会の要求してゐることに、うまく合致すれば、そして喜ばれば、一層幸福であるかも知れない。

よくいろいろ沢山な本に名前を出している人がいる。私はそれを見ると気の毒になる。あんなことして何になるのだらうとも思う。勿論それが古今東西に永久に……とまでは行かなくても、可成の本質的価値のあるものならば、それもよいが、どれもこれも大同小異、あつても無くても世の中の損にも得にもならないものに力を貸すとい

うのは私など怠けものよくするところではない。

私の父は彫刻家として、一応名の通つた、今でも美術史に名前だけはのる位の人だったが、今は、余程の物好きか、出身地の人でないかと全く忘れ去られている。父の生前の羽振りの良さから思うと全く世の中はこんなものだなと慄然たるものがある。

そのせいもあつてか、私は、今から十年程前に、すべての保育雑誌やTVの出演からおりて了つた。その折、ある雑誌社の編集長から、これでお前はおしまいだといったせりふを聞かされた。それでも結局、何時の間にか、彼らは依頼に来て、今度は書いてくれるかということをを押す。気に入ることならば書くし、嫌なら一切書かない。TVでも、「これ嫌いなんです」といったら「そんな人が居てもいいですネ」とディレクターも笑つていた。

わがままだからだろうし、多分、忙しさ

と、その上でのむなしさを、父の死で早くから知りすぎたからだろう。嫌いな人とは全くつきあわれないのも、私の生き方で、この点は息子どもも受け入れてくれてゐるから有難い。

何とか、死ぬ時に虚しさが脳裏をかすめないような生き方をこれからはますますして行こうと決心している。漱石の文学の他に、私の好きなのは兼好法師の「徒然草」であつて、海外に出かける時は、いつもポケット版をどこかに入れて歩き、あきるとどこかを開いてながめて見るし、ヒルティのものも良い。

× × ×

「つくづくと二年を暮すほどだにも、こよなうのどけしや。あかず惜しと思はば、千年を過すとも、一夜の夢の心地こそせぬ」(徒然草第七段)

よい仕事はしたいなあ。

(玉川大学)